

オーストリア・ロースドルフ城「古伊万里再生プロジェクト」

一般社団法人古伊万里再生プロジェクト代表理事、茶道裏千家教授、一九九五文 保科眞智子

ウィーン近郊、チエコとの国境にほど近い閑静な田園地帯に、私が有志たちと展開しているプロジェクトの舞台、ロースドルフ城は静かに佇む。千年の歴史を有する中欧辺境の古城には、江戸時代の輸出用磁器「古伊万里」を中心に、中国・景德鎮、そして西洋磁器で構成される、陶磁器コレクションが大切に伝わっている。かつて邸内を美しく飾っていたことを彷彿させる名品の数々には、もう一つの、胸痛む物語がある。第二次世界大戦の渦中、旧ソビエト軍による城の接收時に、ほぼ全てが壊滅的に破壊されてしまったのだ。

陶片の数は、一万点以上にのぼる。城の薄暗い「陶片の間」の床に、整然とストライプ状に並べられたその姿は、まるで現代アートのインスタレーションのようだ。陶片の海は、静かな迫力となり、異様な光景として脳裏に焼きつく。戦後七十五周年に渡り、これらを保管し公開してきた理由は、過去の悲劇を乗り越え、二度と戦争を繰り返さないようにと訴えた先々代の想いからだという。しかし、これまで専門家による鑑定はおろか、人の目にほとんど触れることなく時が止まっていた。

城主ピアッティ家と茶道家である私は、二〇一六年秋、東京のオーストリア大使公邸で催した茶会にて出会った。数奇な運命をたどった「古伊万里」の物語を聞き、胸騒ぎを抑えられず、日本から手を差し伸べられないかと直ちに行動に移した。翌年には現地を訪ね、研究者や助成団体、メディア等へ話を持ち込み、「古伊万里再生プロジェクト」を立ち上げた。賛同する仲間たちと共に一般社団法人を設立し、現地への学術調査チーム派遣や修復を支援することができた。また、その成果を発表する場として、日本の美術館への橋渡しにも成功した。

活動メンバーは、今年卒業二十五周年を迎えた同期たちを含め、全員が兼業主婦だ。みな様に「古伊万里」のロマンと悲劇に心動かされ、仕事や子育ての合間に、国内外からボランティアワークで参画してくれている。海外経験の豊富な中川華子さん(95文)と皆川ローデ知子さん(95文)のお陰で、オーストリア人の城主一家と強固な信頼関係を構築することができた。また、熟員の手塚良則さん(02商)、神森真理子さん(05文)両氏のご尽力で、復元した「古伊万里」をG20大阪サミットにて披露する機会にも恵まれた。活動資金は、主に助成金やスポンサー協力、そして個人のご寄付から成る。また、専門外の分野にも果敢に挑戦する私たちを、あたたかくご指導くださる諸先輩方の存在も大きく、各位のご支援に心より御礼を申し上げます。

プロジェクトを通して私たちが伝えたいのは、破壊された陶片を平和のシンボルと位置づけ、「再生」させることだ。戦争を知らない世代が「古伊万里」の物語を伝えることは、歴史をつなぎ、世界をつなぐことと考えている。今秋、大倉集古館にて海外初の特別展が開催される(「海を渡った古伊万里」ウィーン、ロースドルフ城の悲劇)11月3日(2021年1月24日)。また、愛知県陶磁美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館にて巡回展も予定されている。この機会にぜひとも、私たちが情熱を注ぐ「古伊万里」と出会って頂きたい。

今後の目標は、オーストリアへの凱旋だ。日本での盛り上がりは、各メディア報道を通して現地でも注目が集まっている。陶磁器の分野において、日本が世界でイニシアチブをとれるよう、この機会を盛り立て、若手研究者や技術者の国際交流につなげたい。また、風光明媚なロースドルフ城の周辺や、古伊万里に縁のある地方に、人の流れを作るお手伝いもさせて頂きたいと考えている。

茶人は元来、人をつなぎ、一期一会を演出する役目を担ってきた。現代の茶人としては、国境を超えて文化をつなぐ役目を果たしたい、と夢は広がっている。お城にコレクションを無事にお返しするまで、「再生」のコーディネート役として、責任感を持って取り組んでいきたい。

<https://www.roip.jp>